

## 生まれていて、よかった

千葉県 田村秀忠

一 生い立ち

私は、明治四十五（一九一三）年二月二十八日に朝鮮（現在の韓国）の釜山で、呱呱の声をあげた。

父は当時、海軍の鎮海鎮守府の御用商人であったが、火事に遭って失意のどん底にあった。それに母が、郷里の実家に預けていた長姉の松江に会いたくなっていたので、私が六歳のときに長崎市中新町の母の実家の近くに帰国した。

中新町は、「飯は食わない十善寺」と言われていた地区だった。「ちゃんぼん」の老舗の「四海楼」を扇のかなめとして石段の坂道が連なり、途中には有名な広濟寺、住吉神社があった。中新町の背後には、海皇中学や長崎測候所があり、正午になると空砲を撃つ時刻を知らせるなど、落ち着いた静かな町であった。

町の住民は、ほとんどが律気者の子だくさんという貧乏人であった。毎朝、「よいとまけ、今日は香焼のかんかんぞ」と、ふれ歩き労務者を集めており、その声で私は毎朝四時半ごろには起されていた。

実家は代々の薬屋で、十三人兄弟の長女が母である。今は九十五歳になる母の末弟が、営々として家業を継いでいる。

私は、五人兄弟の長男であった。長姉が大連の歯科医のところ嫁いだったので、後日、姉を慕って三人の兄弟が渡満した。次姉のスマ子は、小島家に嫁ぎ旅順にいたが、終戦前に帰国していた。しかし義兄は海軍に召集されてシンガポールで終戦を迎え、英国軍事裁判で懲役十年の刑を受けて帰国し、巢鴨で服役した。引き揚げていた私が、心の支えとなって面倒を見ていた。義兄がシンガポールから巢鴨に移送される途次に、護送兵に付き添われて長崎に一時帰ったが、常道の端を、人目を避けるようにして歩く姿を見て、戦争はあってはならないとつくづく感じたものだった。

弟は大連汽船株式会社に勤めていて、終戦により引

き揚げたが、このように私たち兄弟は、期間の長短は別にして中国にて働き、そして引き揚げるといふ運命を背負っていたのであった。

父は日露戦争に従軍し、乃木希典大将の第三軍に属して、旅順二〇三高地の激戦にも参加して凱旋した歴戦の勇士であった。「読み書きそろばん」に長じていたが、後年は、お人好しの安サラリーマンで過ごしていた。煙草は嗜まないが、酒は「斗酒なお辞せず」で、終始正座をして白いハンカチを膝に置き、杯を傾けていた。その姿は古武士をしのばせた。

私は十五歳になったときに、一人で大連に旅をした。船は「淡路丸」で、鹿児島から出帆して長崎、門司、釜山、仁川、大連、そして芝罘に寄港する一週間の航路であった。大連で上陸して長姉の家に着いた。

その船旅の思い出には、門司港でバナナのたき売りの口上が面白かったことと、船中での船員さんによる素人芝居と珍芸を見たことが特に記憶に残っている。大連では、そのころまだ珍しかったエレベーターに乗ったとき、靴を脱ぎそろえて笑われたことや、ア

イスクリームを初めて口にしたことなどがある。平和なよき時代であった。

## 二 学生時代

私の通っていた仁田小学校は、土地柄、無法者や任侠者の子供が多くいて、シャツに赤い二本の印を付けて羽振りを示していた。県主催の大運動会に出場し常に優勝する腕白小僧もいた。小学校を卒業して、市立長崎商業学校に進学した。弓道部に入って弓を引いていた。商業なので株取引について勉強し、語学は将来のことを考えて中国語を専攻した。

長崎商業を卒業すると更に、官立の長崎高等商業学校に進学した。南満州鉄道株式会社への就職を目指していた。三年のときにはポート部で、長崎の年中行事の一つであったポートレース大会に出場し、総指揮者として活躍した。

全国から集まっている学生が、学年別、出身学校別、出身県別などのグループをつくっての対抗レースであった。いまだに忘れられない思い出が二つある。

一つは、当日は長崎港に停泊している大小の船舶が全

部移動してレースのコースが設けられ、早朝から色とりどりの大旗を左右に振って、校歌や応援歌を歌う学生を乗せた団平船が行き交い、ときにはコースを横切ったりしていた。また、陸でも見物の人々とスクラムを組み、歌いかつ踊って勝利を念じていたことである。もう一つは、大会の余韻が夜になっても残り、酔眼朦朧とした状態で繁華街をかつ歩し、丸山花街のちゃんぽん屋で、会費一円五十銭を出しての宴席に、芸者を呼んでどんちゃん騒ぎをしたことなどである。

私は、商業学校の時代から株取引に興味を持っていたが、高商では、「アダム・スミスの経済原論」や「美濃部博士の天皇機関説」に興味を持った。卒業論文は、豊富な資源に恵まれている「王道楽土」をよく知っている者として、「満州を含む統制経済」について論じた。私は、人間の食生活を制御するかに思われる計画経済との間には、一線を画すべきであると信じていた。

### 三 念願の満鉄に就職

私は、南満州鉄道株式会社こそが、卒業論文の考え

を実現するにふさわしい就職先であると思い、昭和九（一九三四）年三月に就職試験を受けに長崎から二回も上京して、満鉄の東京支社で面接と体格の試験を受けた。

面接の方は、保証人になってもらった義兄が満鉄に勤めていた実績から合格したが、体格の方は、乱視のため半ばあきらめかけていたが、これも義兄の骨折りで合格となった。

いろいろな人の力を得て、念願の満鉄の採用試験に合格した。

昭和九年四月十五日には大連に赴任して、大連本社用度事務所倉庫課に所属した。しばらくそこで仕事を覚えるために勤務していたが、その後、エリートコースと言われた購買課に移り、油、セメントなどの購買業務を担当した。

用度事務所には、青柳庶務主任と伊藤倉庫課長の二人の長崎高商の先輩がいたし、鹿野事務所長は義兄と親友関係にあった。用度事務所のはとんどの人は、義兄の大切な患者でもあった。私は、よい環境の部署に

配置されたことを大変な喜びとし、感謝したものであった。

#### 四 天津事務所へ転出

昭和十年、天津に満鉄天津事務所が開設されて、私はそこに転出した。事務所は、フランス租界の中央街に建っている、「新華大樓」の五階で立派な建物であった。

新事務所には、太田所長の下に、庶務課と調査課の二課があった。私は、庶務課の北野経理係長の下で、用度テーブルマスターに任じられた。所員は総員で三十数人の小ぢんまりした組織であったが、満州国内各地にあった関東軍特務機関と親密な協力態勢を保持して、華北全地域における産業、交通、経済などの実情を把握する調査業務を主たる業務としていた。だんだんと仕事量が増加し、それに伴って職員も次々と増えて、事務所は急速に拡充していった。

昭和十一年の二月、いわゆる「二・二六事件」が起きて、私たちもびびくりしたが、天津でもその影響で非常警戒がなされて、私たち青年社員は五階事務所の

エレベーターの前に、机、椅子などを積み上げてバリケードを設けた。中国人の暴徒の乱入を阻止するためで、連日、昼夜交替で警備をしたが、特に何ごとも無く無事に終息し、ほっとしたものだった。

同年十二月になると、内蒙古自治政府の徳王主席と、中国綏遠省の傅作義主席との間で争いが起きるというので、関東軍司令部から、二屯貨物自動車百両を至急に内蒙古の張地に集めて、蒙古駐屯軍に協力して徳王主席を支援せよという命令が入った。満鉄本社とも連絡をとり、なんとか所望の指示は全うするこゝろできた。

私は、神崎課長に随行して張地に出張した。この事件は、「綏遠事件」と言われたが、満鉄関係でも六人が射殺されるという犠牲者が出た。また、日本軍将兵が二十三人、蒙古軍の反乱兵によって枕を並べて銃殺されるといふ悲惨な出来事もあった。しかし、日本の大本営は、「当局は、この事件には関知せず」という発表をしたので、すぐに終息した。後に聞くとこゝろによると、この事件は関東軍の一参謀による陰謀であ

り、蒙古軍の指揮官は先の二・二六事件に関与して蒙古軍に入った元日本軍将校であったということを知って、私は啞然とした。

昭和十二年七月、北京近郊の盧溝橋における日支兩軍の衝突が拡大して、日支の全面戦争に突入した。万里の長城の抬頭營に、バス路線の調査に行っていた私は、直ちに北戴河經由で天津に戻った。中国の英国借款地内の北寧鐵路局（山海関―天津間）管内の各駅や各部署には、既に満鉄の社員が芳賀千代次輸送班の名称の下に配属されていた。

小野資材科長と打ち合わせるために出掛けた途中で、同郷長崎出身の乾通訳と出会った。彼は、「君は、中国語も英語も話せるから小野科長に協力してくれ」と言ったので、そのつもりで科長の席に行った。ところがそこには大勢の中国人が集まっていて、呉局員の通訳で科長と話し合いをしていた。集まっている中国人は全部、北寧鐵路局の局員であった。

陳購買課長、金購買係主任が、盛んに小野科長と言いつつ反論していた。何事かと聞いてみると、日本

石油の新瀉製油所の技士であった呉通訳の日本語は東北なまりであり、中国語は上海弁、一方の陳課長は広東弁で、金主任は西陝弁であって、お互いの意思がほとんど通じていないことから起きている騒ぎであった。

購買の仕事は、北寧鐵路局の陳局長のドル箱であって、陳局長の腹心の部下である陳課長や金主任にとつては絶対に後に引けない交渉なので、強硬になっていた。私は何とか解決しなければと考えて、年長の金主任に耳打ちをして次のように話した。

「資材部門は小野科長の管掌から離して、私が陳課長、金主任を領袖りょうしゅうとした別の事務所を開設する」という内容の提言である。小野科長にも同じようなことを話して説得した。中国人の局員もみんな納得してくれて、その騒ぎは解決した。

そこで私は、イタリア租界に事務所を求めて開設した。山海関、唐山、新河にあった購買事務所と天津の材料所の職員を全部ここに移した。総勢八百四十余人という大所帯の購買事務所を北寧鐵路局から引き継い

だ。陳課長の進言により、業務は通訳を介さずに進めることとし、文書は英文と中国文の両語で作成し、会話は北京標準語と英語の二カ国語を使うこととした。早速に従来の取引先との懸案事項や在庫一覧表を作成した。関係する日本の商社は三井物産だけであった。私は往復書類の決裁と、英国借地であるので、英国様式の税関関連の輸出入書類への決裁サインに追われた。

陳課長や金主任などとの意思の疎通を図るために、昼食時間を二時間とり、主任以上とは一つのテーブルで仕入れ、調理、手伝い人の手当は課長負担、その他は会社負担とした。この効き目があって仕事は極めて順調に実施された。順調だったもう一つの理由は、課員の局採用時の保証人は全員が局の取引商社であって、その商社の印鑑を預り、自分で局のタイプライターを使って書類を作成していたということである。このことは、後日知ったことだが、このような癒着の仕組みは、中国では古今を問わずによくあることで不

思議なことではなかった。

重慶から派遣されていた若い接収員が、「現在、このように中国は日本に接収されているが、五年後には逆の立場にきつとなるであろう」と言っていたが、残念ながらそのとおりになった。

北寧鉄路局の接収に携わった私は、その後京漢、京綏、津浦の各鉄路局の接収にも関与したが、重慶からきていた若い局員の発言のとおり、逆転の立場になろうとは思ってもよらないことだった。私は、終戦により満鉄各局の中国側による接収業務に立ち会って、昭和二十三年に帰国したが、これが運命という文字の典型である。

##### 五 天津・通州事件

天津事務所勤務している間に、戦前の歴史に残る二つの事件があった。その一つが天津事件である。これは、天津の中国人警察官の暴動が拡大して事件になったもので、大連の周水子から日本軍の飛行機が飛んできて鎮圧した。その時、会社の別館で重病人が発生し、私はその看病のために氷を調達して運んでいた

が、途中でこの暴動に巻き込まれて銃で撃たれることを覚悟していた。しかしながら運がよくて、途中で日本軍による暴徒の武装解除に出合い、何事もなく助かったが、死の一步手前で、そのときの気持ちは何とも言われないやるせない思いでいっぱいであった。

今一つの事件は通州事件といわれる事件で、北京郊外の通州で中国兵の反乱により日本の割烹旅館「錦水楼」が占拠され、女、子供は見逃すからと中国兵に偽られ、旅館の塀の前を集ったところをめった撃ちにされて、三百余人が殺戮されるという事件であったが、このときは、満鉄の同僚六人が巻き添えになって殺された。私は悲しくもこの六人の遺骨を、大連本社まで抱えて行った。大勢の遺族に申し訳なく涙を流したものである。その無念やるせない気持ちは、今でも思い出すと涙が流れる。

## 六 好漢、金主任

北寧鉄路局の接収から日本に引き揚げるまで、常に身近にいて私を助けてくれた金主任は、忘れ難い人物であった。

北寧鉄路局の接収時には、同局の購買係主任であったが、昭和二十年の終戦ごろには京漢鉄路局の北京事務所長になっていた。

陳局長とは親しい間柄であったようだ。若いころは、蔣介石の国民党軍にいたが、反乱を起こして四川省の山奥に逃れていたこともあったらしい。後日聞いた話では、終戦後に国民党軍に復帰して、陸軍中將になっていたとのことであった。また、護国寺の住職にもなっていたとの話もあった。

長女の夫は日本の政法大学出身で、蔣介石に同行して台湾に渡り、台湾政府の高官になったそうである。もちろん金主任も一緒に台湾に渡り幸福な余生を送ったとのこと。さらに付け加えれば、うわさ話ではあるが、第二十六代の「青叛」の首領だったと言われている。

その金主任と北京で一緒に暮らしたときがあった。

北京では、前、中、後の三庭園のある中国様式の豪華な大邸宅に、金主任の家族八人と私の家族四人が、共に五年間生活をしていた。東單の事務所まで数キロ

メートルの間には、中南海公園、景山、王府井という景勝地があり、四季折々景色を眺めながら二人乗りの馬車で通勤していた。

出勤は一緒だったが帰りはいつも私一人で彼は遅く帰宅をしていたので、どうしてかと思ひ、ある日夫人に尋ねたことがあった。

夫人は、「日本軍の進駐が早く、主人は最初、同士二十一人と上海に逃げる予定がその暇がなく、また田村さんとの付き合いも深くなってきたので、他の人を逃がして、自分はその家族たちの相談相手になり、保護することに命をかけている」と言った。これで彼の行動のなぞが解けた。

ある日、出勤の時間になっても出てこないの、私は迎えに部屋に行くと、彼はあくらをかき瞑想して、「あまにはにほん」と意味のわからない呪文を唱えながら、よだれを垂らして太い体を前後左右に揺さぶっていた。数分たってから夫人は彼を起こした。彼が言うには、「数分の瞑想で、一日の睡眠時間は十分です」と、事も無げに言った。夫人も笑っていた。こんな得

体が知れない人物が他にいるだろうかと思つたものだ。金主任はそんな男だった。

## 七 満鉄北支事務所

天津事務所は運輸班に組み入れられ、華北自動車会社の創設などで業務が増えて、組織も人も拡充されたので、満鉄北支事務局と名称の変更があった。それに伴って、用度部門は用度事務所に昇格し、私は副参事・受渡係長となった。給料は百円の大台に乗った。

英語と中国語の二カ国語をしゃべれるので、外遊の資格を満たした。これで将来は、外遊をして日本に帰り、傍系の会社で二期ぐらい勤めて、退職金を十分に頂き、長崎に帰郷して田上の別荘で悠々自適の楽隠居という夢を持ち始めた。

しかし、この楽しい夢もはかない夢となつてしまつた。それはほかならぬ敗戦であつた。ああああ！ 敗戦はまったく恨めしい。

天津の白河が大雨のために氾濫し、大変な被害を出したことがあつたが、金主任から、「日本人従業員の救出はするが、中国人従業員の救出は、仕事が多忙の

ためにできないと上司が言っている」と聞いた。あまりにも不遜極まる言葉に私は激怒した。これでは今後、日中従業員の融和などはできず、中国人を採用することもできなくなると思った。早速、私独自で事務所近くに避難所を設けると共に、木船を使って救助活動をする決意をして、私の管理する荷造り材料を使って作業をすることを命じた。事務局員の協力のもとに木船が完成し、金主任と原係員が救助用ロープを体にくくり付け、木船を操って救助活動を行った。人命は、人種にかかわらず尊いものである。日支の戦いが続く限り、日本人と中国人の従業員の気持ちは離れる一方である。こんなときにこそそのわだかまりを除くことが必要なのに、上司の考えは情けない限りであった。

受渡係の倉庫に、付近の住民を避難させたことのお礼にと、避難した住民一人一人が記名した感謝状と盾を持って、鐘や太鼓の鳴り物入りで私を訪ねてきた。私は感激したが、これは金主任が陰で演出したようだった。

さすがに上司は私の行為を黙認していたが、そのうえに慰問品と称して馬鈴薯を贈るという話が出たが、「この非常事態のときに、ゆでたり皮をむいたりと手間のかかる物よりも、手酌で飲める上等の酒のほうがなんぼ感謝するかしれない」と言っていたんかを切った。

#### 八 華北交通の設立と敗戦

昭和十四年に、満鉄を主体にして日支合弁の華北交通株式会社が設立されて、内地の国鉄社員、現地採用の日本人と中国人、そして満鉄社員が協和して華北における水陸の輸送業務を行った。終戦時には、六鉄路局、十五万人の従業員の下に六千キロメートルの鉄道、一万四千キロメートルの自動車路、そして四千キロメートルの内河水路の規模となっていた。私は、購買室で見積と契約を担当する第一係長となった。株式会社と言えば利潤追求の組織体であるが、国策会社の華北交通となると、機密保持、人員資材は軍優先の「軍鉄一路」と思われるが、華北交通は、軍用と民用とは判然として区別されており、嚴重に守られてい

た。それぞれの職場で毎朝、朝礼が行われ、中国語、日本語による「社訓四箇条」を斉唱し、腕時計の針を合わせて仕事を始めていた。社内規律の正しい会社であった。

社訓四箇条とは、

- 一・善隣協和の大義を宣揚すべし。
- 一・大陸交通の使命を達成すべし。
- 一・滅私奉公の至誠を完遂すべし。
- 一・修身齊家の常道を躬行すべし。

華北交通の使命は、東亜新秩序の建設と考えていた。戦略的には、日本軍の満州からの進攻を有利にするため、北支の水陸交通網の整備であった。そのためには、自動車網の完備が最も重要なこととなって華北自動車会社を拡充した。

満州を守る施策は、私のかねてからの持論である「満州を含める統制経済」の実現が一番で、これを推進することが、華北交通の進むべき道であると強く確信して社業に精励していた。

しかるに、鄧州作戦のころから会社で保有していた

軍用材が底をついてきたし、重要な通信機の補充も皆無となった。物量的に敗戦の色が濃くなりつつあった。昭和二十年の七月半ばごろになると上司からも、万が一の場合に会社としてどのような対応をするか、社員の心構えはどうあるべきか、などについてささやかれるようになってきた。

木材担当だった私は、北支は木材資源に乏しいことを考えて、社内に枕木班を設けて「愛路工作」と併行して、現地人から、マッチ、塩などの生活必需品と枕木用材との交換を実行した。

北京周辺の神社仏閣にある大木はほとんど伐採した。次いで旧炭鉱に在留日本人用として造ってあった避難壕構築用の材料として、北京市街のただ一つの景観であった北京大通りの街路樹の伐採も考えた。しかし、これは終戦となったので実行されなかったが、幸いなことであった。

八月十五日の終戦の重大発表は、現在、北京飯店となっているが、当時の会社の前庭で多くの社員と共に、疲れ切った放心状態で耳にした。中国人の同僚も

一緒だった。どんな様子だったか、今になっては記憶がない。

## 九 敗戦後の出来事

敗戦になってすぐに、長い間忠実に、私の家や家族に対して尽くしてくれた中国人のお手伝いさんに暇を出した。泣いて別れを惜しんだ。当時の私の家族は、妻、四歳の長女、二歳になった次女の四人家族だったが、長女は動脈肥大症にかかって病院通いをしていった。そのほかに雑種の白い小型犬の親子も、家族同様にしていった。

ある日、金主任がきて、「田村さん、あなたは戦争中には中国側のスパイとして日本側の情報提供などで大きな功績があったと、私の同志が重慶政府に大うその上申書を出した。田村さん一家を保護するために、無力な私ができる精いっぱいの手段です。お気に召さないでしょうが、了解して胸の内に納めておいてください」と、涙ながらに話してくれた。引き揚げるまでの間、金主任にはいろいろと尽力をもらった。私たち家族が無事に日本に帰国して、今日このように平

和に生きているのも、まったく彼のおかげでその恩を忘れることはできない。

こんなこともあった。華北交通株式会社の接収最高責任者は、中国の北京野鉄司令官であったが、北京に進駐したときには、金主任が、「日本人として初めての者を、貴官にご紹介する」と言って、私を司令官に引き合わせてくれた。

また、重慶政府の満鉄接収の最高責任者である陳という人が、長春に向かう途中に北京に立ち寄ったときに、私たち華北交通の四人の同僚を金主任が陳氏に紹介し、随行員として同行できるように骨折ってくれたこともあった。四人共、元は満鉄社員であり、満鉄は心のふるさとであり、是非行きたいと決心し、満州国の地図を出して、真冬の興安嶺で伐採した大木が鉄道用枕木になるまでの工程などを詳しく説明した。陳氏も納得して随行することが決定し喜んだが、満州国の錦県付近に八路軍が進出してきて雲行きが悪くなってきた、家族を連れての満州行きは無理となり、取り止めとなった。

かつては親しく行き来をしていた中国人同僚の中には、「漢奸」扱いとなることを恐れて近寄りなくなつた者もあり、私も近づくことを意識的に遠慮していた。

そんなある日、「田村さん。日本人社員が、書類を持ち出したり焼却したりしているが、止めさせてくれ」と、中国人同僚が言ってきた。私は、純情なる日本人社員が、滅私奉公の成果である書類をどう処分しようが勝手ではないかとも思ったが、将来の日中友好のことを思うと、このまま放置すべきではないと思ひ直して、中止するように処置をした。この処置により、後日多数の日本人社員の命を救うことになったことを金主任から聞き、よかつたと満足な気持ちになった。

ある日の真夜中に、突如として女性を交えた数人の中国警察官が来て家宅捜査があった。実際はこれで三回目の家宅捜査であった。妻は、済南生まれであるので中国語は達者で、要領よく立ち回って無事に捜査が終わり、彼らも去ろうとしていたときに、運悪く石炭

置場の地面から隠してあった日本刀が顔を出しているのが見付かった。彼らの目の色が変わった。私は、連行されることを覚悟した。

日本刀が顔を出したのは、飼っている犬が食べ物を隠すためにその場所を掘つたためであったが、犬に文句を言うこともできない。

成り行きに任せて沈黙の一瞬だった。そのうちに女性警察官が犬を見付けて、そのかわいらしいしぐさについて母性愛をくすぐられたのか、お互いに犬についての話が始まり、そのまま話をしながら門をくぐって出ていった。危機一髪とはこんなことを言うのだろうと、冷や汗ものだった。私たちは、手を取り合つて小躍りして喜んだが、犬は、私たちの喜びを解せずじゃれていた。

残務整理の一日を終えて人力車で帰宅する途中で、中国の学生グループに包囲されて、袋たたきにされたことがあった。たたかれながらも勇を奮つて自宅に向かって走り出したが、門の前で力尽き倒れてしまった。そのときに、道路の向こう側で手招きをしている

人力車夫の姿がちらつと目に入ったので、それを目標にして七転八起しながら夢中で駆け抜けて車夫に助けられた。その後の数日間は、意識不明の状態でベッドの上になっていた。しかし、体の治らないうちに接収現場に呼び出されて働かされた。

そろそろ引揚げの順番が回ってくるだろうと思ひ、荷物などの整理をしていたら、ある日、佐藤主計局長に呼び出されて、「僕も残るから、君も残ってくれないか」と、再三、再四の口説きにととうとう説得されて、接収業務のため再度要員に指名されて長期留用者となった。

接収は、敗戦前に伐採した神社仏閣の大木から始まって、逐次、事務所関係に入っていた。北京、天津間の用品事務所にも行ったが、私は通訳の仕事を担当した。私の通訳語は簡単で短かったので、聞いている人には何か物足りなかつたようで、いろいろと苦情を言う人もいた。しかし、中国の接収員の言っている言葉をそのまま日本語にして伝えれば、接収される側の日本人としては耐えられない屈辱感を味わうので、

悲しい気持ちになり言葉も詰まってしまうので短くしていると答えていた。

北京から天津まで中国側の接収員に同行したが、天津用品事務所を最後に無事終了した。この間、四六時中、中国の若い警察官が抜き身のピストルを構えて監視しており、その監視の下での作業は不気味で、不安が高じてつらかつた。

敗戦国民の悲哀を、しみじみと感じながらの接収業務だった。長期留用の任務も解除されて、いよいよ待望の引揚げの許可が下り、晴れて引き揚げる身となった。

#### 十 引揚げとその後の生活

昭和二十三年の初めに、東単南池子飛竜橋の宿舎からトラックに乗せられて引揚げの途についた。

天津港では、港内凍結のために一カ月ばかり豊台の倉庫に收容され、そこで寝起きをしていた。総勢約七百人ばかりが同じように留められていた。豊台倉庫の一人当たりの使用面積は約一メートル四方で、そこに荷物を置き通路をつくと起居できる場所はほとんど

なく、男はみんな、夜昼共に屋外で過ごすようなことになった。この収容所での一カ月の生活の間に、帰国してから使うつもりで準備していた品物は使うか売るかして、あらかた無くなってしまった。

やっと、米軍の上陸用舟艇（LSTと言っていた）が到着して、それに乗り込んだ。携行していた荷物を調べると一個足りなかった。乗船のどさくさに盗まれたのだろう。ほかには考えられなかったが、ここで申し出ると共同責任を問われて、みんなに迷惑をかけるだろうと思って黙っていた。どんな処罰を受けるかもしれないので泣き寝入りをした。

無抵抗の敗戦国民の悲惨さを、嫌というほど味わった一件であった。

引揚船は、長崎県の南風崎港はえのさきに入った。日本晴れのさわやかな風景に迎えられるの上陸であった。日本の空気のおいしいことを初めて知った。

同時に引き揚げて上陸した朝鮮からの引揚者の惨めな姿に接して、つくづく悲哀を感じた。同じ引揚者であっても、朝鮮からと中国からとはこんなに差があ

るのかと驚いたが、中国引揚者の元気な姿に接すると、私は中国国民と中国政府の恩情あふれる対応に感謝せざるを得なかった。

あの原爆によって壊滅的な打撃を受けた長崎市に、親子四人で引き揚げた。幸いに、両親は健在で温かく迎え入れてくれた。

食糧の苦勞もなく、家の瓦や柱は爆風でやられていたが、住むには支障がなかった。大連からは、姉、弟の家族八人が引き揚げて来るので、私は、自立更生の道を模索した。

長崎実業という水産会社を設立した。しかし、生易しいものではなかった。軌道に乗せるための資金集めは大変で、値上がりしつつあった土地を売却して国民金融公庫からの借金は完済したが、会社はどうとう休業状態となってしまった。しばらくして、知人の紹介で、長崎県水産加工業協同組合連合会に奉職して、サラリーマン生活を続けたが、昭和三十年ごろになると漁獲高が減り、昭和三十五年には休業してしまい、致し方なく私も退職して、家族を引き連れて東京に向

かった。

満鉄入社時の身元引受人であった、十河国鉄総裁を頼って訪ねたが、すぐには就職の当てはなく、しばらく東京で生活することとなって、妻の父が昔から面倒をみていた中村氏の家に身を寄せた。しかし、彼の周辺には、天皇陛下のことを、「彼」、マッカーサー元帥のことを、「やつ」と、呼ぶような奇怪なグループがうごめいていた。

その仲間の一人に貸金業者がいて、その方の世話で東洋金属工業株式会社という会社に就職した。この会社は、金属潤滑油に関するの特許を持っている会社で、東京証券取引所の二部上場会社であった。外国との関係もあり、英語のできる私は重宝がられて仕事に励んでいたが、世間にはよくある特許権者と株主との間に確執が生じて会社は解散することになり、私は、また失業したが、気力、体力共に充実、おう盛であった。

昭和四十四年に、長女夫婦は千葉県の八千代市に家を建て、私たち夫婦を迎えてくれた。私はまだ元気で

都心の会社に通っていたが、往復六時間もかかる通勤生活だった。

家族はみんな元気で、それぞれ健全に生活をしていて幸福である。

あの中国での苦しみや悔しさが、遠い昔のことのようになつてきたが、それでも何か事があると思ひ出される。しかし今になると懐かしさの方が大きい。と同時に、今日の平和の有り難さをしみじみと感じるのである。

市内におけるいろいろな社会活動に微力を尽くしているが、「平和」ということについて多くの人と話をする機会はなかった。「平和」ということを口にするのが、政治的思想的にとられて避けて通っているように思われる。これが現在の標準的な小市民生活なのであろう。

現在の世界は、一触即発でいつ戦争という悲惨な事態を呼び起こすかもしれない状態で、各国の指導者の首に、「平和の鈴」をつけたと思うのは私だけではないだろう。私は、「日中友好を基盤に、緩やかな統

制経済立国」の完遂に向けて「平和の礎」になる気迫だけは、今でもいささかの衰えもない。

「余生とは、言うことなかれ照る紅葉」が、今の私の気持ちである。

## 上海からの引揚げ記録

神奈川県 和泉 淳 弘

はじめに

昭和二十一（一九四六）年一月二十二日、といつても、この日が人々にとって何も特別な日ということではない。何かの記念日というわけでもない。しかし、私の両親や私たち兄弟姉妹にとっては、忘れることのできない日である。それは、私たち一家にとって苦難の頂点となった日であったからだ。

私の家族

昭和二十年八月十五日の終戦を、私たち家族は上海で迎えた。しかし、この敗戦という歴史的な日をどう

いう状況の中で過ごしたのか、玉音放送をどのように聞いたのか、私にはその当日の一貫した記憶がほとんどない。天皇陛下の甲高い声と、雑音の中から断片的に聞き取れる内容から、今まで不滅不敗と教えられてきた「神国日本」が、負けるはずのない連合国側に負けたらしいと漠然と理解したと、その時に照りつけていた真夏の太陽のまぶしさだけはよく覚えている。それ以外は、私の記憶からすっぽりと抜け落ちているのである。

多分、あの日を境として起きた、予想もしない環境の激変により、記憶が切れ切れになってしまったに違いない。

その当時、私たち一家は両親と四人の兄弟姉妹の、合わせて六人の家族だった。私は上海日本中学の三年生、姉は上海第二高等女学校の四年生、妹はまだ学齢前で、弟は二年前に上海で生まれ幼児だった。

私の出生地は大阪で、小学校には大阪で入学したが、父の仕事の関係で途中から上海の小学校に転入した。私たち家族が内地から外地である上海へ移った